

<4月25日(金)-26日(土)第1戦レポート>

2016 D1 GRAND PRIX SERIES Rd.1 TOKYO DRIFT

コースコンディション：ドライ

PACIFIC RACING TEAM with DUNLOP 村山悌啓選手(車両：NAC ガールズ & パンツァー S14 激メガテック)

最終成績：単走16位/総合16位

<本文>

今年も東京お台場での「TOKYO DRIFT」でD1GPシリーズが幕を開けた。昨シーズン中はマシントラブルもあり、なかなか一定の仕様で臨めなかった村山選手だが、昨シーズン最後に問題となったシーケンシャルのドグミッションをHパターンのドグミッションに変更。あとは大きな仕様変更はなく2016シーズンに臨む。エンジンはSR20改の2.4L仕様。GTX3582Rタービンを組み合わせて620psをマークする。



今年のコースレイアウトはいままでになかったものだ。コースは左回り。直角コーナーを抜けて加速してから、一気にテールを振り出すコースだ。進入スピードと振りの鋭さ、そして角度が高得点のためのカギとなる。

村山選手は練習走行2本のあいだに、ギヤ比を合わせるためにファイナル交換を行い、また路面のグリップが低いことを確認してややグリップを上げる方向にセッティング変更を行って予選本番に臨んだ。

単走予選1本目は、97.49点とまだ安心できない点数だったが、2本目はひときわ高い車速から鋭い振りを見せ、スピードを落とさずにメリハリのあるドリフトを見せて98.24点を獲得し単走予選を突破。後半のセクションでやや点数を落としてしまったものの、飛び込みのスピード感はトップクラスだった。これで土曜日の単走決勝進出を決めた。



そして翌日の単走決勝。なぜかスピードがのせられず、スムーズなコントロールは見せたものの、前日より点数を落としてしまう。ハラハラさせられる展開となったが、16位ギリギリで追走トーナメント進出を決めた。

しかし、最下位での単走ファイナル突破となってしまったため、追走トーナメント初戦は、単走優勝を果たした昨年のチャンピオン川畑選手という難敵だ。まずは川畑選手が先行。村山選手も果敢についていき、ほぼ同時振りを見せたが、川畑選手より角度を浅くとっても距離を詰めることはできない。1本目は五分に終わった。2本目は村山選手が先行。川畑選手はストレートでやや距離を開けてから飛び込んだが、コーナーで村山選手のインに入り、確実にアドバンテージをとってきた。これで村山選手は残念ながらベスト16敗退となった。

今回は果たせなかったが、次回は高速コースである富士スピードウェイでシード入りを狙う！

#### <村山悌啓選手コメント>

単走は、予選の日の練習走行がいちばんいい点数出たんですけど、そのときのイメージで走ろうと思ってただけで、そんなに問題はなかったですね。ただ、単走決勝では失敗しちゃったんであぶなかったんですけど、ギリギリ神様が味方してくれて……。でもギリギリだから、追走の相手がやな感じになってしまっ……。

川畑選手が速いのはわかってたんで、乗りづらくなっちゃう部分はあったんですけど、クルマをいちばんトラクションがかかる状態までセットアップを変えちゃいました。進むように、っていうのをすごく意識して。ただ、それでも後追いで相手のインに入れなかったのがいちばん悔しいですね。0.5でもアドバンテージとれてたら、まだよかったんですけど。

開幕シードって一番とりやすいところなんで。今回はベスト8を狙ってたんですけど、ちょっと届かなかったです。シード獲りは次に持ち越しですね。